

扶助者聖マリアのノヴェナ

4日目 (5月18日 火曜日)

手放さなければならないもの。

⁵⁰盲人は上着を脱ぎ捨て、躍り上がってイエスのところに来た。

<コメント>

調布：ADMA 発足以来、私たちは月に一度、四谷の管区長館に集まって祈りと分かち合いを行っていました。

しかし、コロナになって今までの活動が強制的に閉ざされ、私たちは突然行き場を失ってしまいました。毎月行われていた集いもなくなり、ただただ無常に3・4か月の日々が過ぎ去りました。このままでは、皆の絆も、熱意も失われてしまうのではないかと、私の心にそんな不安がわいてきました。

そんな時、小さなささやきから促された行動をきっかけに、アンヘル神父様によるZOOMへお誘いを受けることとなりました。そのころはまだ、私の生活の中にはZOOMはあまり浸透してはいませんでしたので、まず、私自身が体験してみることから始めました。皆の反応はわかりませんでした。とりあえず会員にZOOMを知らせ参加できる方を募りました。毎日のZOOM ロザリオの体験を伝えることによって、苦手なパソコンやスマホを駆使してでも新しいことに挑戦してみようという気持ちが、皆の中にもみられるようになりました。

今では、私たちの毎月の集いも、ZOOMで再開しています。ZOOMでつながる新しい試みは、かつての体験や手法に執着していたら味わうことができない新たな可能性を感じさせてくれました。それは、たくさんの新たな方々との出会いと、国を超えた多国間の人々とのつながりです。ZOOMによって、今までの大きな壁が崩され、さらに神様が望む方向に舵を切らせていただいたのではないかと感じています。(藤永)

碑文谷：コロナ禍でみんな苦しんでいます。碑文谷教会の広いグラウンドを、一般の人に開放するのは賛否両論あります。

自分たちの利益や損得勘定を考えれば、碑文谷教会は教会の門を閉じることが、この世界的に考えれば一番です。

でも、歴代の主任司祭は、ドン・ボスコの精神で、一般の子供たちや若者に教会の広いグラウンドを無償で開放しました。(山本)

土浦：日カ連の県女性の会の委員として2ヶ月に1度ほど友部修道院で10名ほどが企画をしたりしていますが、例年なら司教様や著名な方をお招きして修養会など開催していますが、今のところコロナのためすべてが中止になっています。修養会、や講話を楽しみにしている方々がとても残念がっているのが現状です。心の栄養不足と嘆く声も聞こえています。今回は、マリオ司教様からメッセージをいただき皆様に届けることができました。

もう1つは、サマーキャンプです。小学校3年生から高校生、そしてリーダーとして大学生などが友部修道院に集まり2泊3日を過ごします。茨城県の各教会から約50名を超える子ども達が集まります。

沢山の協力者にささえられながら、朝はミサから始まり、学年別に分かれての神様のお話、午後は楽しい作品作りなどを行い、夜は夕の祈りで過ごします。そして、協力してくださるノートルダムのシスター方にも感謝です。食事は保護者の方々の協力に支えられています。それが、コロナのため、昨年、そして今年も中止になりました。でもきっと祈りながら再開を待っていることでしょう。このキャンプに誘ってくれたOさんにも感謝です。私の他者への喜びが増えたのです。(江口)

調布： 一つは単純に喜びの表現で、躍り上がるには重い上着はじゃまだった。もう一つは、何もかも捨てて良いほどの気持ち。持ち物を捨ててイエスの呼びかけに応えた。それは古い自分を捨て、新しい自分になるということを表している。バルトマイだけでなく、このような光景は福音書のいろいろな場面に出てくる。その人たちに共通するのは、神への祈り。祈りによって神の声が聞こえる。(後藤)

調布： Sr.松本から扶助者聖母の御絵を頂き、クロスステッチの先生に図案化を依頼し、マザーマザレロが1針1針刺しながら奉仕なさったであろうことを黙想しながら拙い私の手で、でも心を込めて1針1針刺しました。とても愛おしく手放す事などさらさら考えられませんでした。

額装されて届いた作品を見た瞬間思いがけず Sr.松本にプレゼントしたいという思いが湧いてきました。執着も未練も愛おしさもどこかへ吹き飛んでいました。

Sr.松本に届けたら「とんでもない。こんな貴重なものを・・・でも預かせて頂きたい」と言って下さり修道院の玄関に飾って下さいました。私の拙い作品を皆さんが喜んで下さっている。私の喜びは感謝で一杯になりました。この事を友人に話したら「貴女はとても良い手放し方ができたのね。」と言われ始めてこれが手放し方かと悟りました。手放す事は苦しみが伴う事と思いついていましたが小さな人間の私には神様が大きく働いて下さり大きな喜びと感謝を与えて下さいました。

その後、マリオ山野内倫昭師がさいたま教区司教に叙階されました折り、Sr.松本が ADMA のみなさん一同の心からの感謝をこめて扶助者聖母の額を祈りと共にマリオ司教様に贈られました。

この度、この額をマリオ司教様が浦和の司教館から館林教会までお運びくださると Sr.松本から聞きました。手放して私の与り知らない作品ですが本当に光栄に存じます。(猿川禮子)

及川ひとみ

今まで手放してきたものがあります。

色んなものが手の内にありました。

夫を失い息子との生活の中で

私が残してあげられるものを物として考えていました。

必死に仕事をやり名誉・地位・家・・・。

手にし、その結果私は病気になり名誉・地位を手放しました

しかし家を手放したら子供に残してあげられる物が無くなると思いついていた私は必死に守り続けていたのです。

そんな私にイエス様は息子を通してこだわっていた家を手放すことを勧めたのです。息子はそんな家を望んでいない事。その結果この家を手放すことで私は色んな意味で解放されました。

そして息子。私の人生のほとんどが息子中心でした。ですから手も口も出して私が抱え込んでいました。

彼は就職し結婚をして自分のやり方、考え方を主張し始め、私は戸惑い怒りを抱えたりして苦しんだのです。

しかし祈りの中で息子を神様へ委ねる事。私が抱え込んでいるものを手放すことこそが大切なことに気づきました。私自身を神様へ委ねて生きていくことができるように祈りの中で生活しています。

カツミ・オカダ : 手放さなければいけないもの

4日目の分かち合いをします。

3年間以上に渡って透析を受けてきました。それは腎臓が上手く機能していなかったからです。私はこの病気を受け入れることができませんでした。祈りと神への奉仕を通して、徐々に病気であることを手放し（受け入れ）、神の次元の計画を受け入れるようになりました。

病院でロザリオの祈りを唱え、扶助者聖マリアが、信頼とたくさんの愛をくださって、そのおかげで臓器移植の奇跡を受けることができました。扶助者聖マリア、ありがとうございます。私の母であるマリアの大きなマントに包んでくださったことに感謝します。

ルシア・モリノ

私の祖父母、家族、友達は戦争の後、将来のために、そして沖縄に残った家族親戚を助けるためにペルーへ行きました。

年月を経て、同じことが私の家族と多くの人たちに起きました。母国、家族、友達、快適な家、土地財産、商売などをペルーに置いてきました。全ては、もっと良い将来を探すために、特に安全に暮らせる場所を見つけるために。あの時代のペルーは、テロによって大変悲惨な状況になっていましたから。

多くの場合、変化は抜本的で難しくて痛ましいのです。しかしイエスに従うためには、もっと自由になって、多くのものを手放さなければならないことを知っています。傲慢、虚栄、心の頑ななエゴ、他人の欠点を捌いたり、人をネガティブに見るなど、精神や魂に根付いたそれらのことを取り除かなければなりません。

その代わりに、神様が望んでいることを全て取り入れていかなければ。愛、謙遜、受け入れ、信仰、愛情、優しさ、懸命さ、沈黙、御言葉を受け入れて。祈り、神に忠実で、忍耐強く、信頼と希望、正義と無償の奉仕。そしてと他の人を尊重することが必要です。謙遜な心で神に願います。私が相応しい道具になれるよう、導き、助けてくださいますように。

聖母マリアに肖ることができますようますように、少しでも。

<扶助者聖母マリアのご像の紹介>

足立恵子さんの扶助者聖母マリア



10年前くらいにシスター松本から頂いたものです。星美学園の校門の前にいらっしゃるマリア様と同じです。

学生の時、同幼稚園に勤めている時も、必ず朝、帰りの時に挨拶をしていました。

5年前の私の入院、11時間におよぶ手術の際には、病室で見守って下さいました。

そして、その1年後、夫の入院、手術の際に、やはり病室で見守って下さいました。

いつも有難いと思う時も、心配、病気の時も、家族の集う居間で、時には病室で一緒に居て下さいます。

祈れば必ず助けられるという経験をした私たち夫婦は、マリア様のお取り次ぎによって、今しあわせに過ごしています。

<最後の祈願（ドン・ボスコが作成した扶助者聖マリアへの祈り）>

「おお、マリアよ、力あるおとめ、
輝かしい教会の母、
素晴らしいキリスト者のたすけ、
戦いにあって配置された軍勢のような力を持ち、
世界のあらゆる異端をうちこわし、
不安や苦難、
困難にあってから私たちを守るマリアよ、
私たちが死を迎える時、
魂を受け取り、
天国へと導いてください。
アーメン」

<祝福>